
魔法少女の世界に転生とかしてみる

八雲家の使用人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女の世界に転生とかがしてみる

【Nコード】

N0919Z

【作者名】

八雲家の使用人

【あらすじ】

魔砲少女な世界に転生してしまった主人公。少年時代からやり直しになり、思うようにいかない日々。取り合えず、頑張って生きようと思います。能力微妙だけど。／／／注意 この作品には、ハーレム・ご都合主義・主人公最強などの成分を含みます。そういうのが苦手な人はご退場ください。

転生とかしてみる（前書き）

はじめまして、八雲家の使用人です。

迸る妄想が抑えられず、ついにはやってしまいました。反省はしている、だが後悔は（ry

ストーリーが適當すぎる。設定も適當。ご都合主義エ

批判お断りです。批判するなら読まないで下さい。

それでもおっけーね！な人はどうぞ先にお進みください。あなたが勇者か。

転生とかしてみる

日常というのは何事にも変えがたい大切なもので、変わることに無いもの。

そう考えていたのはいつのことだっただろうか？

まだ小さい小学生だったか、それともヤンチャした中学生だったか、はたまたアホした高校生の頃だったか。

少なくとも、俺という存在にとって、普通というものはごくごく当たり前のことで、変わる筈のない日常だったはずだ。

俺という人間は、ごくごくどこにでもいる高校生　とは少し言いがたい、オタクによくありがちな転生というものに憧れている男だった。

変わらない日々を過ごし、家に帰ってはゲームやアニメ三昧。学力は日々少しずつ低下していき、進路について日々悩む日常を送っていた。

なりたいものや、夢はなく、目指すものもない。そんな中で二次創作でよく見かける転生などといったものは魅力的で、憧れた。

人生をやり直したい。そう思っていたことは1度や2度ではなく、日々そう考えていた。

だけれど、そんなことは現実になるはずもなく、日々同じようなことを機械的に繰り返す日々。

そんな日常だったが、少なくとも、そんな日々には満足していた。

だけれど、そんな日常は脆くも崩れ去り、自分が死んだと自覚することも無く、俺はあつというまに命を落とした。

転生

どうやら、俺には転生をする権利が与えられたらしい。

もちろん、日々憧れていた夢のようなことを断るはずもなく、転生をした。

運のいいことに、能力を与えられて、アニメを何度も見直した「魔法少女」の世界に転生されるらしい。

この時、テンション上がってあまり考えずに能力を口に出した俺を殴ってやりたい。能力には欠陥があった。

もらった能力はこれだ。

f f 召喚獣などを召喚できる「召喚の才能」とf f 零式のセツナ卿並の召喚の才能、魔力を吸い取る「魔力吸収」。

あまり強大な力は渡せないとのことで、この能力を選んだのだが、充分チートな筈のこの能力がOKとのことだったので、コレにした。直前までしていたゲームがf f だったので、たまたまこれしか思い浮かなかったというのも理由だが。

さて、この能力のどの辺りが欠陥能力かというと、召喚とはすなわち魔法である。魔法ということは当然「魔力」がいるわけで。

ぶつちやけると、強大な召喚獣を召喚できるほどの魔力がなかったのだ。具体的に言うと、魔導師ランクC+相当。

当然、強力な召喚獣なんて呼べやしない。そのための「魔力吸収」だったのだが こちらも欠陥能力だった。

「魔力吸収」には条件がある。相手に触れること。それが大前提であり、そうしなければ吸収できやしない。

触れるためには近接格闘しなければならないし、そのためには強くないといけない。つまりは、どちらにしろ魔力が必要で、ろくに吸収できやなかった。

じゃあ、雑魚相手に吸収を繰り返していればいいかと聞かれれば、それも駄目だった。

どういうことかというところ、魔力はあくまで吸収できるだけで、限界値　つまりはC+以上の魔力を蓄えることはできなかったということだ。現実是非常である。

悲劇はこれだけではなかった。

俺という転生者は、親というものが存在しなかった。

9歳ぐらいの縮んだ体に転生し、気がついたら高層ビルの立ち並ぶ、ミッドチルダと思わしきところにいた。

当然、お金なんてものがあるはずもなく、サービスと思わしきミッド語を理解できたのは良かったが、文字を書くことをできなかった。

路地裏を彷徨っていると、大人の管理局員と思わしき人たちが現れ、助かった　なんて最初は思ったりしたが、地獄の始まりの間違いだった。

思い出して欲しい。管理局の上層部が何をしていたかを。

連れて行かれて先ずやらされたのはスキャンである。早い話が、

魔導師適正があるか、片っ端から調べられたのだ。何人もの子供がスキャンされ、適正ありと適正なしに仕分けされる。

適正なしはどこかに連れて行かれ、適正ありにはデバイスが支給された。

「今から、貴様らには仕事をしてもらう。よく働いた者には衣・食・住を保障してやるが、役にたたん奴らは研究所行きだ。死なない程度に頑張ることだな。」

デバイスを手にした俺達に、言われた言葉はこれだけだった。

その場できちんと理解できていたのは恐らく、外見とは違う精神を持つ俺だけだっただろう。

安物のストレージデバイスを手にした俺達は、バリアジャケットと簡単な魔力弾、それとバリアの仕方だけを教えてもらい、すぐさま仕事に放り込まれた。

目にしたのはまさしく殺し合い。

非殺傷設定なんてものはないかのごとく、魔法が飛び交い、周りの子供、少年、大人が傷つき、倒れていく。敵は質量兵器を使ってきたり、遺法魔導士だったり、とにかく非殺傷なんて生温いことは

言ってられなかった。

殺らなきゃ、殺られる。そんな世界。

後々考えたのだが、俺は運がよかったのだろう。C+という魔力、レアスキル有りとのことで周りより多少魔法を学習されたストレージのデバイス、「魔力吸収」という魔力を長持ちさせるレアスキルに召喚魔法。召喚魔法に関しては、さすがはセツナ卿と云うべきか、簡単な召喚魔法なら使えることができた。

コレだけあって、生き残るのが精一杯。他人を蹴落とし、のし上がり、ようやくできた僅かな余裕も全て戦闘訓練に使わなければ生き残ることすらままならない日々。

原作介入なんて考えれる余裕なんてあるはずもなく、そこにある知識から少しでも強くなろうと足掻かなければいけない。

転生なんてしなければよかった。

そう思うようになるまで、時間はかからなかった。

転生とかしてみる（後書き）

取り合えず、一区切り。

もう、内容が適當すぎるwwwさすがのりとテンションとその場の思いつきで構成されてるだけあるwww

なんかシリアスっぽいこと描いてあるけど、実際そんな小説にならないかも。

誤字などあれば、報告してください。誤字に定評がある俺ですから。

どうしてこうなったw

謎の機械とか戦ってみる（前書き）

2 話目を投下。

別にそんなにストックとか作ってるわけじゃないけど。

超展開になるかも。

謎の機械とか戦ってみる

「慣れる」

人間とは恐ろしい生き物である。

他の生き物とは違い、高い学習能力を持ち、自我を確立させて思考することができる。

2年。

この世界に来てから、それだけの年月が経った。相変わらず、俺達のような存在の日常は変わらないもので、生きるか死ぬかの世界を彷徨っていた。

魔力は魔導師ランクBランク相当になっていた。さすがは成長期というべきか。酷使しすぎたせいというべきか。

地上部隊の対違法魔導師部隊所属レンヤ・カワカミ 三等陸士。魔導師ランクは陸戦魔導師Cランク。

それが俺の今の肩書きであり、2年の成果でもある。

「対違法魔導師部隊」

その名の通り、違法魔導師を取り締まる部隊であり、俺の所属する糞部隊である。

発足したのは結構最近のことで、そんなに長い間あるわけではないが、どこぞの権力者がもっと上にのし上がりたいがために出来た部隊である。

無茶いつて作つたため、規模も小さく、予算なんて唯でさえ資金不足な陸に、こんな部隊まで回す金などある筈もなく、雀の涙ほど。

そのため、人材を雇えるはずも無く、それでも上に行きたかった上司がやったのは、路頭を迷う子供を使うこと。

魔導師適正を調べて、適性あれば儲け物。なければ研究所に売り飛ばすという方法で金にするという違法手段にでた部隊であり、けれど、世間はそんなことは知らない。対違法魔導師部隊が犯罪を犯してどうするんだか。

対違法魔導師部隊といっても、活躍しているわけでもないの、仕事はえり好みせず表では派遣任務とかで他の部隊に行ったり、人材不足のところを手伝ったりしており、世間的な認識は「便利屋部隊」。

もちろん、労働基準法？なにそれおいしいの？と、地球の自分が言いたくなるくらいの重労働で違法魔導師の依頼があれば、それもきちんとなしている。

陸戦C、魔力はB相当の俺は、完璧な戦力扱いで、違法魔導師の取り締まりや、ランクにあわない任務など、もっぱら年中戦闘のしっぱなしで、何度も倒れた経験があるが、治療が終わり次第即戦場行きて、死線をさまよってばかりだが。

俺のやってきたことをそのまま俺の功績にしたのならば、もっと上にいけた筈　　なのだが、そこは上司が見事に掻っ攫っていつており、いまだに三等陸士。恐らく、このままあがることはないだろう。

新暦67年　冬

11歳になった俺は、今日も今日とて死線をさまよう。

今回の任務は、とある世界での足止め任務。

数が相当いる正体不明の機械（ガジェットと思わしき敵）との戦闘が俺達の任務なのだが、陸戦Cである俺が最高戦力というまさしく自滅しにきたような任務であり、本格的に使い捨てるつもりなのだろう。

上にとって、俺達価値のないクズのような魔導師はポイ捨てるゴミと同程度なのだろう。

バンバンと激しい音がなり、あちこちで戦闘が始まる。

「オラッ！」

『ブリッツアクション』

俺は軽い掛け声とともに、手に持つ剣型アームドデバイスを振る。

その特定動作に反応してデバイス無機質な機会音声をだし、腕の振りなどを高速化させる魔法であるブリッツアクションを発動させる。

ガキンツと、剣がガジェットと衝突し一瞬抵抗するも、前世よりも遥かに高くなった身体能力でごり押しし、剣を振りきる。

その場に立ち止まっていると、他から攻撃されるのですぐさまその場を離れると、倒したガジェットが爆発し、焼け跡を地面に残す。

「やっぱり、ガジェットが」

付近にガジェットが居なくなったので、アンチ・マギリング・フィールドAMFの効果がなくなり、魔力の消費効率の良くなった身体強化を途切れ途切れに発動させ、次の敵の居場所へ向かう。

すれ違い様に、近くに居たガジェット？型を、ブリッツアクションで加速した攻撃で破壊していく。

え？AMF内では魔法の発動は出来ないんじゃないかって？

それにはきちんと理由がある。それは、魔力をできるだけ圧縮させて魔法を行使しているからだ。

つまり、魔力が完全にかき消される前に、魔法を発動してしまう。そうすれば、例えば「ブリッツアクション」なんかは、加速した後は魔法をかき消されようとスピードを維持するだけでいいので、火力はあがる。

投げたボールは、その後力を加えてやらなくても真っ直ぐ飛んでいく。それと同じだ。

移動を続け、目の前に現れたのは？型が5機。

これはちよつときついな。しょうがない、魔法を使うか。

「揺らめく焰、猛追！」

『ファイアボール』

詠唱文を使い、魔法を起動させ発動する。足元にはミッド式でもベール力式でもない召喚魔法特有の魔方阵が展開され、魔法が出現した。眼前に現れたのは5つの炎球。真っ直ぐ飛ぶように加速した炎球はガジェットに直撃に、かき消されることなく破壊する。

これは俺が生き残るために編み出した魔法の一つだ。

俺の召喚魔法は、なにもf f召喚獣だけに適用されるわけではない。それを応用し、他世界から精霊を召喚、使役し、魔法を発現させる。

この時発現した魔法は、精霊の力を借りた自然現象。なのでAMFは効かないのだ。詠唱は特に決まっておらず、自分のイメージにあった文にするとより強い力が顕現する。

え？詠唱文がどこかで効いたことあるって？気にしない、気にしない！

「はあ、やっぱりガジェット相手はやりづらいか。魔力のない機械だから魔力吸収ができないし あんまり調子に乗っていると魔力が尽きるな。」

剣の構えを一度解き辺りを見渡すが、辺りには何も無い。

どうやら、ここいらはあらかた片付いたみたいだな。 まあ、この辺はあんまりいなかったし、仲間が心配だ。できるだけすぐ戻った方がいいだろう。

俺はそう判断して踵を返し、仲間の下に向かっていくが、そこで足を止めることになった。

《全員撤退しろ、繰り返す。全員早急に撤退しろ。》

突如飛んできた念話に足を止め、思わず本部があるであろうところ

を睨みつける。

《戦闘不能者はいつも通りこちらで全員回収する。正体不明の機械は残っているだろうが、気にせず早急に撤退しろ。管理局本局期待のエース様のご登場だ。》

本局期待のエース様 ああ、主人公の高町なのはか。まあ、こちらとしては助かったがな。

回収。いつもの生命力を使った転移魔法か。

俺の所属する対違法魔導師部隊には、転移の力をもったペンダントが支給されている。それはなぜか。

簡単な話、部下を捨て駒にして違法行為をしていることをバラしたくない上司を作った、使用者の生命力を吸収し発動させる転移魔法だ。転移先は本部で、死ぬ直前になると根こそぎ魔力を奪い取り、強制的に発動させる魔法だ。死体を回収し、隠蔽するために。

上司はその所は才能あったみたいで、大量生産はできないが、人数の少ない俺達の分くらいは作れるらしい。忌々しいことに、死体からペンダントを回収し再利用。これで抜け穴の分も困らないってやつだ。

本当に、嫌な部隊だ。これだから嫌いなんだ、管理局は。

謎の機械とか戦ってみる（後書き）

どうしてこうなったw

私アニメしか見てません。間違った知識等あれば、ご指摘ください。

無理やり修正します。

疑問点などあれば、どうぞ感想まで。

原作介入とかしてみる（前書き）

3 話目投下。

今日はこれが最後です。

原作介入とかしてみる

走る。

撤退命令が出たので、所々効率的に魔力で身体強化をしながら高速移動し、雪の積もっている大地を駆け抜ける。

本部までの距離が近くなってきたのだが　少々離れすぎたか。

「

」？

違和感を感じ、空を見上げる。

エリアサーチを使いたい所だが、あまり魔力を使ってられない。もったいないからだ。

さて、どうしようか。と悩んでいると、本部から念話が届いてきた。

《何をやっている！！結界なんぞに捕まりおって！》

ああ、そうか。この違和感は結界か。

だとすると、周りに被害を出さないようにするためかな。白い悪魔様が魔砲を撃つと、しゃれにならない被害になるしな

内の部隊にも是非ともほしいところだ。そんな結界張れる結界魔導師が、内にいるわけないしな。

《ちっ！コレだけ頑固な結界だと、破壊しないで転移は無理だ。仕方ない、貴様は援護でもして活躍してこい。幸い、便利屋部隊呼ばわりの俺達の部隊なら、いても問題ないだろう。》

《 了解しました。 》

俺は走るスピードを落とし、耳をすませて戦闘しているであろう方向を見極める。

まったく、面倒なことに巻き込まれたもんだぜ。

所変わって戦闘場所。

そんなに離れていなかったようで、走り出してすぐに到着した。まあ、結界の範囲内なんだし、そんなに離れているわけがないのだが。

ドガンッ！ドガッドガンッ！

「派手にやってるな。　　なんだあの馬鹿魔力は？」

到着したと同時に目に入ったのは、極太桃色閃光ビーム。アホほど魔力を撒き散らし、ガジェットのアMFを問答無用で突破して、シューティングゲームの雑魚キャラを打ち落とすかのごとく破壊していく白いバリアジャケットのツインテール少女。その近くには、ガジェットを打ち砕くように破壊するチビっ子もいる。

いや、チビっ子は失礼か。

「無駄に空中の魔素濃度が濃い。　　これなら、空中にも立てそう
だ。」

脳内で術式を組み立て、レアスキルを応用し、魔素を足元に集めて固める。

魔力で軽く身体を強化し、ジャンプした後、そのまま空中に立ち、さらにもう一段ジャンプ。それを繰り返し少女達の下へ跳んだ。

「助太刀、しましょうか？」

突然話かけられたにも関わらず、ヴィータと思わしき少女はビクリとしなかった。流石は百戦錬磨の騎士。恐らく気配で気づいていたのだろう。

「お前、どのどいつだ。」

こちらを振り向かず、鉄球を呼び出し、手持ちの武器をフルスイング。打ち出された鉄球はガジェットを打ち抜き、撃墜する。

見事なコントロールだな。

「地上部隊の対違法魔導師部隊所属レンヤ・カワカミ 二等陸士です。」

「便利屋部隊か。何で便利屋部隊の三等陸士がこんなところにいるんだ？」

「任務の途中に結界に巻き込まれて、戦闘しているようなので加勢に。」

ようやくこちらを向いたヴィータ（仮）はジーツとこちらを見たあと、再び前を向いた。

「嘘はついてないみたいだな。あたしは武装隊の特務捜査官補佐のヴィータだ。武装隊の演習で来ていたんだが、帰還の途中で襲撃された。」

なるほど。俺達の部隊は、高町達に襲撃しようと待っていたガジェットを見つけて攻撃。倒しきる前に高町達がやってきて、ガジェットはそっちを襲撃。あの糞上司は、それを高町達が倒しにやってきたと勘違いしたわけか。

「それで、お前。魔導師ランクは何だ？飛行してるってことは、それなりだと思うが。」

「陸戦Cです。」

「はあ！？おま、そんなでここにきたのか！？どうやって飛んでる！？」

「魔力を足場にしてます。早い話がレアスキルですね。」

「すっこんでろ！奴らAMFを使ってくるみたいだ。陸戦Cなんかで敵うと思ってるのか！？後はあたしらがやつとくから！」

これだからエリートは。

ランク、ランク。ランクと実力は関係ないだろうが。

そりゃ、普通は関係あるかもしれないが、あくまで普通ならだ。俺の場合は力の功績も正等評価されてないし、力が特殊だ。多分総合B＋ぐらいはあると思う。

相性もあるし、ガジェット？型程度に遅れをとるつもりはない。

「そうはいいますけど」

「いいからさつさと」

軽く右手を横向きに突き出し、魔法を発動の用意をする。

レアスキルを発動。術式にねじ込み、魔力結合阻害を力技で突破し、圧縮する。

空気中の無駄に濃い魔素を吸収し、右手に集め、術式に魔力をながし、魔法陣に魔力を留める。消費した魔力はさらに吸収で補給に流し込む。コレを繰り返すことで、大技が可能になる。編み出した応用の一つだ。ただし、今回みたいに無駄に空気中に魔素がないと使えないけどな。

因みに、スターライトを参考に思いつきました。

充分魔力が溜まったところで、2メートルくらいの魔法陣が右手に顕現する。

「ひっこんで？」

グイータが啞然としてこちらを見ている。

使えない雑魚かと思いきや、いきなり大技っぽい魔法を行使しようとするれば、まあそうなるわな。普通。

「創世の火を胸に抱く灼熱の王

」

詠唱文は、本来存在しない。精霊の力を借りた魔法、仮に「精霊魔法」としよう。精霊魔法と同じで、イメージが大事なのだ。決まった文はいらない。より正確にイメージすることにより、消費魔力は変わる。

「灰塵に化せ！出て来い。『イフリート』」

『コール サモン イフリート』

魔法陣が眩い光を放ち、顕現されたのは炎。

灼熱の炎は形を変え、変化し、炎の魔人へと姿を変える。

「殺れ、イフリート。『地獄の火炎』だ。」

顕現したイフリートは俺から魔力を奪っていき、炎を収束させ、解き放った。

広範囲にばら撒かれた火炎は、機械を焼き尽くし、破壊する。

「」

「（やっべ、思ったより魔力を持っていられるな。これで魔力C級の召喚獣かよ 通常の俺なら5分も持たないぞ。）」

嘩然としているヴィータを見ながらそんなことを考えていた俺だが、思ったより魔力を持っていかれて結構焦っていたりする。

この状態でもう一体の方の召喚獣を維持できるかどうか

「それで、俺が何をすれば？」

「あ、ああ。このままある程度破壊を頼む。」

「了解！」

ヴィータの返事を聞いた俺は、イフリートを単身で突っ込ませた。

あんな魔力を喰らう技なんか、何度も使えるかっての。

その後の俺は、イフリートを維持した状態でちまちまと攻撃し、辺りのガジェットを破壊した。

相変わらず桃色閃光は飛びかっていたので、いつ巻き込まれるかひやひやしたが。 射程長すぎなんだよ！味方巻き込む気か！！

「おい、そっち終わったか？」

戦闘終了したので、顕現させていたイフリートを還していると、後ろから声を掛けられた。

考えるまでもない。ヴィータだ。

「こっちは終了です。武装隊の皆さんも無事みたいですし、一見落着いですかね？」

「そうか、助かった。礼を言う。AMFがあったからな。あたしらだけじゃ時間が掛かっただろうし。」

「あ、ヴィータちゃん！大丈夫だった？心配したの！」

俺がヴィータのお礼に返事を返そうとすると、ヴィータの後ろから奴がやってきた。

白い悪魔である。

「それは、こっちのセリフだぞ、なのは！毎回無茶しやがって。大体、AMFを砲撃で無理やり突破するなんて何を考えてるんだ。」

「にやははは、出来そうだったから」

「そういう問題じゃねー！この際言っ「あー？」」 なんだ？
いまあたしは、なのはと話してるんだ。」

「いや、そうじゃなくて。そちらさんはどなたですか？」

もちろん、俺が言っているのは高町のことである。

一応知ってるが、不審がられないようにな。

「ん？ああ、そうかお前は知らなかったな。こいつは」

「高町なのはっていうの。よろしくね、えっと」
「レンヤで
す。レンヤ・カワカミ。」
「レンヤくん！」

なんだか知らないけど、名前を嬉しそうに呼ばれた。訳分からん。

それと、ヴィータ。俺が知ってるはずないじゃないか。普通は。紹介くらいするのが普通だと思うんだが。別段知りたい訳でもないけど。

さて、この時点で俺はすっかり忘れていた。この時起こる出来事を。だから反応が遅れてしまったのかもしれない。

高町の後ろから迫る、ステルス機能と騎士服を易々と貫く攻撃力を有するガジェット？型の存在に。

「ッ！高町ッ！後ろだ！」

「え？」

高町とヴィータが俺の声に反応して俺の方から顔を逸らし後ろを向くと、近くまで迫っている蜘蛛に似た多脚ガジェット。脚を振りかぶり、今にも突き刺しそうだ。

「
ッ！？」

そう、この時点なら、高町のアホみたいに硬いバリアが間に合うはずだった。そう、はずだった。

急に加速し振り向きながら魔力を練り上げるその動作。それが、負担だらけでボロボロだったリンカーコアを刺激し、高町に硬直を与えた。

「なのは！？」

「くそっ！」

そのとき、俺はやっと思いついた。高町なのは撃墜事件を。

何で思い出さなかったのか、数分前の自分を殴り飛ばしてやりた
い。

エリートは嫌いだ。優秀だし、自分に出来ないようなことを平然とやってのけるし、こちらの気持ちを理解してくれないし。

だけれど、自分には見捨てるという選択ができなかった。

何か抵抗したわけでもなく俺はあっさり死に、転生先では自分が無力なばかりに周りで死んでいくやつがいる。

ズルしてもらった能力を使って、一度死んだ身で周りを見捨てて生きていく。そんな自分の罪滅ぼしの自己満足かもしれない。だけど、目の前で助けられる分のことくらい、やってもいいだろ？

いつもは無理だけど、今は空气中に魔素がいっぱいあるから。

3回の動作、ソレに反応して、まだ解除していなかったデバイスが反応する。

『アクセルフィン ブリッツアクション ソニックムーブ』

速度強化系の魔法の三重掛け。普段なら一気に減る魔力で気絶だとかするけど、そのうち二つは魔素で肩代わりしている。

視界が変わる。あまりの速さに、強化している視力が追いついていない。そんな中で高町だけ抱えるとか器用なことではできなくて。

出来たのは、何故か頭に直撃コースの脚から盾になって腹をぶつ刺されることだった。

激痛が腹を襲い、血が大量に腹から噴き出して、意識を失いかける。

刺さった脚を、振り払うように振り回され、脚から取れた俺は地面に落ちていく。

無様だなあ。俺。

原作介入とかしてみる（後書き）

相変わらず超展開。

ちよつとしたら設定もだそうかと。

これって読む人いるのか？

12 / 4 詠唱修正

入院とかしてみる（前書き）

思ったより読まれていて少し啞然。

だが、フリーダムにやっていくつもり。誤った表現とかあれば言うてください。

作者、現代文赤点スレスレです（笑

他の教科もだけどw

入院とかしてみる

突然やってきたやり直しの機会。

馬鹿やって大した力はもらえなかったし、つらいこともたくさんあったけど、それでも後悔はしていない。

原作介入とやらを反射的にやってみたけど、代わりに自分は瀕死の重傷。

もう絶対やらねえ。

魔法少女リリカルなのはStrikers始まります。

「知らない天井だ。」

目が覚めると、真っ白な天井の部屋に横たわっていた。

取り合えず、テンプレ的な台詞を言ってみた俺だが、状況を把握できず、混乱してしまう。

結構な量の機材に囲まれていて、心音を表しているであろう機会音が、無音の病室を満たしていく。

「ここは病院　なのか？」

おかしい。

具体的に何がおかしいかというと、ちゃんとした機材が揃っていることである。

万年金欠の俺の部隊に、こんなところに長期入院させるような余裕はないはずだ。それに、死に掛けていた俺が回収されていないのもおかしい。

「あら？起きたかしら？」

「ッ!？」

俺しかいないはずの病室から声がしたので、思わずビクリと跳ね起き、そちらを振り向く。

そこには女性がいた。　いや、俺はこの人を知っている。何度か写真を見せながら上司が何か言っていたのを覚えている。

「あんまり激しく動いちゃだめよ？絶対安静なんだから。」

「 リンディ提督。」

リンディ・ハラオウン。

それが彼女の名前で、原作にも登場していた主要人物だった一人だ。

高町なのはを会話誘導で管理局の戦力とした張本人。

それだと、彼女がここにいる理由が分からない。彼女は海の手筈だ。一介の三等陸士の病室に来て何を考えている？

「ふふふ。そんなに警戒しないで頂戴。現状説明を任されただけよ。」

「 そうですか。」

怪しい。余計に怪しい。本当に何考えてやがる。

「現場の收拾は、あの場にいた武装隊が抑えたわ。謎の機械 仮名称ガジェット・ドローンは破壊、重症の貴方となのはさんに応急処置を施してこの病院に運び込んだのよ。」

なるほど。回収されてないかと思ったら、そういうことか。

俺が怪我していたのは腹であり、それらの治療や処置を施すために、首にかけていたペンダントを外したんだろ。そうなれば俺を回収することはできない。

「貴方が撃墜された後、すぐになのはさんも撃墜されたから、皆慌てて。ちよつと事態の收拾に時間がかかったのよ。」

「そうですか。」

「あまり驚かないのね？」

「何がですか？」

「なのはさんが撃墜されたこと。まるで知^しっていたみたいだから。」

「正直言いますと、予想通りつてところですかね。」

「予想通り？」

俺の言葉に、リンディ提督の目が細まった。

いや、予想通りつてのは原作云々は関係なしに予想通りだね。俺が血を噴き出しながら落ちていくのを顔面蒼白になって見ていたし。あんなんじゃない、とても防御なんて行動がとれる筈がない。

その点、ヴィータは流石はヴォルケンリッターといったところか。俺の血飛沫に見ても動揺していただけみただし、あの場を收拾したのも彼女だろう。

「はい。自分が血を嘔き出しながら落ちていくのを見て、顔面真っ青にしてみましたし。」

「それもそうね。ごめんなさい、変なこと聞いちゃって。あんな部隊に所属していたみたいだったから。」

「いえ、自分も言い方を気をつけるべきでした。 ん？」

あんな部隊？

俺は、周囲の時間が停止したように感じた。

俺のいた部隊は、あんな呼ばわりされて疑われるような部隊だっただろうか？

実態はそうだったが、世間的には違う。ということつまり

「あなたの部隊、調べさせてもらったわ。あんなペンダントを持っているみたいだったから。」

「 そうですか。」

バレているということに他ならない。

まあ、部隊自体は別にどうでもいいんだけどさ。

「それで、自分の処遇は？」

問題なのは、自分のことである。

強制的にやらせられていたとはいえ、不法侵入や器物破損なんて
ざらにあったし、そんなに多い頻度ではなかったが 人殺しもし
た。

これだけやっというて、無実に近いのはありえないだろう。

「 地上本部直営の犯罪者更生部隊に異動。そこで5年の無料奉
仕。あと魔導師ランクの破棄及び階級は訓練生と同じ扱いだそうよ。」

「よりによって自殺部隊ですか。」

自殺部隊、そう呼ばれている部隊で、局で犯罪を起こした犯罪者
の勤める部隊であり、他の犯罪者を取り締まる部隊でもある。

そもそも、犯罪者更生部隊とは何なのか。

まず、管理局が絶対正義の名の下にあるということを前提として

聞いて欲しい。実態はともかくとして。

さて、まずは正義の味方が犯罪者をどう扱うかを考えてはもらえないだろうか。特撮ヒーロー物でもいいし、王道バトルものでもいい。正義の味方が活躍して、戦って、悪を倒した後その悪はどうなるか。

物語の内容にもよるが、捕まえたりして悪を殺さなかった場合を考えてもらいたい。例えば俺の居る世界「魔法少女」の世界では、Strikersの時の悪であるスカさんは監獄にぶち込まれた。だけれどナンバーズの一部除いたメンバーは更生施設に入れられている。

そう、つまり正義は悪をも見捨てないのだ。

では、である。俺達のような人殺し犯罪者 とくに重罪死刑級の奴らはどうなるか。

答えは更生と称して危険な仕事をやらせるのである。そして仕事で死んでくれれば殉職扱い、仕事をこなせばありがたい程度に考える。そうした考えの下にできたのが犯罪者更生部隊である。

ようするに死にいくのと変わらないのだ。破棄される前の魔導師ランクを基準とし、その2つか3つぐらい上のレベルの仕事をやらされるらしい。

だけれど、おかしい。どう考えても、俺のやったことレベルでは犯罪者更生部隊に5年も入れられる筈がないのだ。強制的に

やらされていた、まだ比較的に子供であること。これらのことを考慮すると、重罪にはなっても、犯罪者更生部隊に入れられるほどではない。

そもそも、あそこは狂人レベルの殺人快楽者が入れられるようなところである。

「ごめんなさい！」

俺の思っていた疑問が顔に表れていたのだろうか。リンディ提督は俺に対して頭を下げてきた。

「どうして、貴女が謝るんですか？」

「本来なら、貴方はそこまで重罪にはならない筈だったのよ。」

それはそうだろう。俺くらいのやつであそこの部隊に入れられたら、死体処理班がいくつあっても足りない。

「貴方、なのはさんを庇って怪我をしたでしょ？それが問題だったのよ。」

「どういうことですか？」

「なのはさんは撃墜されたって言ったでしょ？あの子、あれでも将来は有望視されてるの。」

そういうことか。

これで納得がいったぜ。要するに、上のやつらは俺なんかがどうなるうとも、高町の経歴に泥がつくほうがいやなんだな。

「要するに、俺は捨て駒にされたってことですね？」

「ごめんなさい。あなたを庇いきれなかったわ。」

「別に、貴方は庇ってくれた。その事実さえあれば、嬉しいです。」

「せめて、何か映像でも残っていればよかったのだけれど。」

「目撃者が1人だけじゃ信じてくれなかったでしょ？」

さて、現状の説明をしようか。

高町なのは及び俺はガジェット？型により撃墜された。二人は重症、恐らく原作通り高町は飛べなくなっているだろう。たくさん無茶やってきて唯でさえリンカーコアがボロボロだったんだ。今回の事件がトリガーだったんだろうな。

世間的な認識は、エース様が変な一般局員と共に撃墜されたってところか。ここで重要なのは、どちらが庇ったのかがわからないことだ。

本来、高町の経歴には、馬鹿やって一度飛べなくなり、他人を巻き込み自滅した。と載る筈である。　　が、上が将来の輝かしいエース様の経歴にそんなものが載るのを許すはずも無く、事実を隠蔽する。

高町が自滅したのではなく、一緒に落ちた局員が自滅して高町はそれを庇ったんだと。リンカーコアの件は、高町が馬鹿やっていたのではなく、襲撃された敵の攻撃のせいにしてしまえばいいんだと。

その上、俺自身は犯罪やっていた部隊の所属だ。丁度よかったんだろう。

決め手は映像が全く残っていなかったのだ。　　それに関しては俺が原因である。

「俺自身は、そんなに強くないんですよ。魔力も低いし、特定条件下のみでしか実力を発揮できない。だけれど、周りはそんなことを知らない。」

「だから映像を消したのね。」

「いくら目撃者がいても、よっぽど親しくないと信じられないような内容ですしね。」

「でも、どうやって?」

「こいつですよ。出ておいでフィー。」

俺の言葉とともに、俺のデバイスがおりてあると思わしきところ

から、明るい光の玉が飛び出して、一直線に俺に向かって飛んでくる。

飛んできた光の玉は、元気よく俺の周りをビュンビュンと飛び回り、やがて俺の目の前に落ちて着いた。

リンディ提督を見ると、啞然としている。

「電子精霊のフィーです。」

「その子を使つたの？」

俺の言葉に、宙に浮いている光の玉を、不思議そうに見つめるリンディ提督。

電子精霊とは何か。

俺が電子精霊の存在を知ったのは、無限書庫に、映像などの隠蔽をできる存在がいなか探しに行った時である。

彼らは精霊という存在でありながら、電脳世界　ようするに電子機器などに宿り、機械系やネットワークの情報操作を出来る存在である。精霊という存在なので、魔力を与えてやればそれなりに働いてくれるし、光の玉のように実体化もできる。

機械系の映像消去は言うまでも無く、デバイスの映像記録すら書き換えてくれるのだ。使用魔力も低く、ロウリスク・ハイリターン。俺にはありがたい存在である

俺から説明を聞いたリンディさんは、ますます不思議そうにフィーを見つめる。あ、フィーが俺の後ろに隠れた。

「用件はそれだけですか？」

「ええ。伝えることは伝えたわ。」

そう言って出て行こうと立ち上がったリンディ提督だったが、出て行きずらそうに立ち止まった。

「どうしたんですか？」

「あなたは、死ぬのが怖くないの？」

「そうですね、怖くないといったら嘘になりますね。」

「でも 「だけど!!--」」

「どうしようも ないんですよ。」

「 」

「一人にしてください。」

リンディ提督は、俺が拳を握っているのに気づいたのだろう。何も言わずに出て行ってくれた。

それを確認にた俺は、握っていた拳をベツトに叩きつけた。柔らかい布団の感触がして、ベツトが軋んだ音をだす。

「 うっ ううっ 」

悔しかった。何で自分ばかりこんな目にあわなくちゃいけないんだと。

善意で助けたのに、それがこの様だ。管理局の上層部はとことん俺が嫌いらしい。

いや、高町達は悪くないんだ。悪いのは自分のことしか考えない上層部で、何も知らない彼女たちに当たったところで八つ当たりでしかない。

説明したら、罪悪感を感じて、罵ったら自分が悪かったと謝ってくれるだろう。だけれど、そんなことしても意味はない。

だからこそ、悔しかった。

入院とかしてみる（後書き）

相変わらずの超展開。

今回はなのはさん視点で書いてみるつもり。

フラグの立て方が雑すぎるwww流石俺www

少女視点、フラグとか立ててみる（前書き）

どうも、本日2話目の投稿です

現実逃避をしていたら、進む妄想が抑えられなかった。気がついたら1話分書きあがっている　だど！？

毎回2・3000字を目安に書いてるのに、気付いたら4000字越してる。何故だ。

なのは視点で相変わらず超展開です。

主人公が適当にフラグを立てます。

そんな簡単にフラグが立つたら、俺はとっくの昔にリア充だわ！！
！！ってのがあるので、そういうのが駄目なら見ない方がいいです。
それでもokな貴方は同志だ。

少女視点、フラグとか立ててみる

目の前で落ちていく同い年ぐらいの男の子。

私はどうやら庇われたみたいで、血の気が引いた。

彼はどうしているだろうか？

立ち止まりたいこともあるけれど、それでもやっぱり進むしかない。

魔法少女リリカルなのはStrikers始まります。

「空はもう、飛べないだろう。」

目の前で自分を庇って落ちていく彼を見て、呆然としていた私も落とされて、目が覚めた病院で言われた一言だった。

聞いたときは、頭が真っ白になって。とても信じることなんて出来なくて。

だけれどやっぱり現実で。

1週間。

私が病院に入院して、それだけの日にちが過ぎていた。

私の入院をリンディさんから聞いた様子のお父さん達やフェイトちゃん達も駆けつけてきて、心配してくれて、皆で泣いて。

彼はどうなったか。それだけが気がかりで、私が聞くとフェイトちゃんが怒ったように話してくれた。

彼が撃墜されたのは私のせいではなく彼が自滅したからで、私はそれを庇ったこと。

彼がいたのは犯罪をしている部隊で、彼は犯罪者更生の部隊に行くとのこと。

自分で言うのもなんだけど、あれだけ怒ったのは、久しぶりだったと思う。

最初は恐らく事情を知らなくて、一緒に呆然としていたヴィータちゃんも一緒になって叫んで。

それは違う。彼は何も悪くない。悪いのは無茶した自分だ。

フェイトちゃん達は信じてくれたけど、周りの人たちは全然信じ
てくれなかった。映像が残ってなかったのがいけなかったのかな？

最初の3日は立ち直れずボーツとしていたけれど、ここ最近はり
ハビリを頑張ってます。

もう一度、空を飛びたい。

「ッ！」

少し足に力を入れて、左右の棒に手を突き立ち上がってみるけど、
次の瞬間には激痛が走り、倒れてしまった。

隣に控えていた看護師さんが私を支えてくれて、地面に倒れるこ
とはなかったけれど。

「うーん やっぱりこれ以上は 。高町さん、少し休憩しまし
よう。」

「え、まだできます！」

「いいから、ほら。お医者さんの言うことは聞いておくの！」

支えられていた体を車椅子に強制的に戻されてしまって、リハビ
リ施設から遠ざけられてしまった。

むう、体が不自由なのは不便なの。はやてちゃんも、こんな気持

ちだったのかな？

看護師さんに、どこに行きたい場所はないかと聞かれたので、私はリハビリ施設と答えたのだけれど、却下されてしまった。しかたがないので、風に当たりたかったから屋上に運んでもらった。

屋上に着くと、看護師さんはちょっとお仕事があるから、ここでじっとしてるのよ？と言った後、出て行ってしまった。チャンスなの。

車椅子を端に寄せて、フェンスに手をかけ立ち上がる。手の力を緩めないようにつかまりながら、一步を踏み出し歩き出す。

「何してんだ？」

「にゃ！？」

突然後ろから声をかけられて、思わず力を緩めてバランスを崩してしまい、前のめりの倒れてしまう。

「おっと。」

が、後ろからお腹に手を回され、支えられた。

誰だろう、と顔を上げてみると、そこには私を庇った彼がいた。

血の気が引いていくのを感じる。今もつとも会いたくない人物にあってしまった。

「俺の言えることじゃないが、怪我人は大人しくしてろ。　　ちょつと失礼。」

「え？きやあつ！」

言いたいことを言い終えた彼は、私を支えたままの腕をそのままにして、新たに腕を私の足に回して一気に私を持ち上げた。

重たくないだろうか？

「え、ちょ　　ふえ？」

「はい、文句はあとで受け付けまーす。」

所謂お姫様抱っこ状態になった私は、彼に運ばれ車椅子に強制的に戻される。途中、引いたばかりの血の気が今度は上って顔が真っ赤になってじたばたと暴れてみたが、どうしようもなかった。

完璧に子供扱いされてるの。

車椅子に私を戻した彼は、車椅子に手を掛けて、フェンスと私を引き離した。あう、貴重なりハビリ時間がつ。

「それで、こんなところで何してたんだ？まあ、理由は大体检討がつくけど。」

「む、それはちょっと失礼なの。なのは、そんなに分かりやすすないもん。」

「リハビリ止められた　ちょっと休憩　看護師さんがどこかに行くよしチャンス！　だろ？」

「あう」

言い返せない自分が憎いの。

「そういうレンヤ君は何やってるの？」

「注射って、痛いよね。」

「それって私よりだめだよね！？」

それにしてもレンヤ君、注射が怖いなんて。ちょっと意外なの。大人っぽいし、何でも出来そうな感じがするし。

レンヤ君は私の車椅子をベンチの隣まで運ぶと手を離し、ベンチに座って隣に腰掛けた。

「それで、大丈夫だったか？高町さん」

「なのは」

「え？」

「なのはって呼んで。」

「大丈夫だったか？なのは」

「うん！」

名前で呼んでもらえた。ちょっぴり嬉しい。

「まあ、それは置いといてだ。何をそんなに必死にリハビリしてたんだ？」

「」

「空飛べなくなつて、誰も責めやしないぞ？」

「それは」

いきなり核心を突いた会話に、私は動揺してしまう。

確かに私は必死に　いや、焦ってリハビリをしてしまっているんだと思う。飛べなくなつて、誰も責めない。確かにそうだ、人間はもともと飛べるような生き物じゃない。飛べなくても、なにも言われない。

「　怖いのか？」

「ッ!？」

「怖いんだな。魔法が使えなくなつて、今ある関係がなくなつてしまつことが。」

「ちが　　「本当か?」」

「それは本心か?断言できるか?そんなことないつて。」

「　　」

彼の言葉が　いや、彼の言葉だからこそ、私の折れそうな心を容赦なく責め立てていく。

元々、私が魔法を知ったのは偶然だった。とある事件で落つてきたユーノ君に協力して、偶然魔法を使えるようになっただけの少女。

それまでは、なんの取り柄もなくて、ごくごくどこにでもいる、一人ぼっちの少女。

そんな一人ぼっちの私に、今の交友関係をくれたのは魔法だった。フェイトちゃんもはやてちゃんもヴィータちゃんも　今いる沢山の友達に、魔法があつたからといっても過言ではない。

そんな私から魔法がなくなると、どうなるだろうか?それはちがうと今ここで断言できるだろうか?

怖い。

今の関係が崩れてしまうことが。

嫌だ。

昔の一人ぼっちにもどってしまうのが。

「さて、少し俺のことを話そうか。」

「？」

そう言って、彼は真剣でどこか寂しい目をして、話始めた。

「俺が犯罪をしている部隊にいたことは？」

「フェイトちゃん　友達から少し。」

「そっか、俺は元々孤児だった。」

そして、聞いた。彼のことを。

レンヤ君のいた部隊は、上司が偉くなりたいがためにできた部隊で、人材はお金がないので孤児を連れてきていたらしい。犯罪なんて普通、生き残ればそれでよし。人殺しの経験もあるそうだが、無理やりやられた。それでレンヤ君は犯罪者扱いだったのか。

だけれど、そんな部隊でも友達ってものはできるみたいで、レンヤ君にも何人か居たそうだ。

「それじゃあ、その友達はどうしてるの？」

「死んだよ。」

「え？」

「犯罪者の質量兵器に当たって皆死んだ。」

「ごめんなさい」

「別にいい。」

レンヤ君が言うには、自分は仲間の中でだったら恵まれていた方だったそうだ。運よく生き残って、それでも新しい子供が増えて、また死んでいく。その繰り返し。

いつも隊のなかで一人。少し、ひとりぼっちだったの私に似ている。

「ちょっと、分かる気がする。怖かったんだろ？魔法が使えなくなるのが。」

「うん。」

「嫌だっただんどう？一人に戻るのが。」

「うん、うん！」

「辛かったんだろ？皆がいなくなってしまうかもしれないことが」

「うん。」

まるで私の全てを知っているような気がして。私も彼が辛いのは理解できて。

彼の一言一言が、私の今にも泣いてしまいそうな涙腺を刺激していく。

そんな時、彼は私を抱きしめた。

暖かい。

「え？ええ？？」

「今は泣いとけ。我慢は良くないぞ。」

動揺している私を置いて、彼は話していく。限界だった。

「ふえ、ふええええん！！」

彼は、泣いている私の頭を撫で続けてくれた。

「泣き止んだか？」

「うん、もう大丈夫なの。」

「そっか。」

私が泣き止んだのを確認すると、彼は撫でていた手を止めて、私から離れていく。

ちよっぴり残念かも。

「悩んだ時は友達を頼れ。きっと力になってくれる。」

「うん。フェイトちゃんにもいろいろ言ってみるの。」

「ま、いい友達そうだし、大丈夫だろ。」

「カワカミくん!!どこにいますかー?!」

彼と話していると、遠くから彼を呼ぶ看護士の声が聞こえてくる。

そんな声に彼は慌てて立ち上がり、ここを離れようとする。

「やっべ！看護師がくる！？」

「頑張つて逃げてね。」

「くそっ、なのはは人事だからって余裕そうにしゃがって！」

立ち上がった彼は屋上と下の階に繋がる扉に向けて走り出した。

「レンヤ君！」

「ん？」

扉を開けた彼を私は叫んで呼び止める。言っておきたいことがあるから。

「なのはと友達になつてくれる？」

突然の言葉にしばし瞬きを繰り返した彼だったが、やがてにっこり笑つてこう言つた。

「もう友達だろ？名前で呼び合つてるしな！それと」

「魔法なんてなくても、俺達はずっと友達だからな！」

その言葉が、私の中に響いた。多分これから一生忘れないと思う。

あーあ。今の私、顔が赤いだろうなあ。

「ごめーん、お待たせ。そろそろ病室に戻るわよ。それともリハビリする？」

今までどこかに行っていた看護師さんが戻ってきて、私に問いかける。

「いえ、大丈夫です。」

「あれ？なのはちゃんあんなにリハビリ必死だったじゃない。いいの？」

「はい。」

私の心境の変化に、看護師さんは戸惑い気味。今までは、一分一秒早く魔法が使えるようになったけど、今は大丈夫。無茶はしない。

魔法が使いたくないわけじゃない、ただ

「魔法なんてなくても、友達はいますから。」

そう思えるようになっただけ。

無茶しても、友達が心配するだけだから。

「あー！？レンヤ君に謝ってない！！？」

「急にどうしたの！？」

私が彼に謝るのを忘れていて、思い出して一騒ぎするのは別のお話。

少女視点、フラグとか立ててみる（後書き）

本日分の奴はコレで打ち止めです。

迸る妄想が抑えられなかったら、もう一話投下しちゃうかも。でも、期待しないでください。

主人公は、時と場所によって似非敬語を使い分けます。基本的に誰にでもフランクです。

フラグ（笑）そんなに簡単に立たないから（笑）

誤字してき等お願いします。リクエストあれば、一応言ってください。検討はしてみます。ヒロインについても、後々アンケートなんかやってみようかと。

やってみたかったんだよね、アンケート。

長文失礼しました。

次元犯罪者とか逮捕してみる（前書き）

どうも、どうも。本日3回目の投下です。

迸る妄想を抑えることが出来ませんでしたww

だが、自重しない。それが俺だから（キリッ

最後キャラ崩壊があるかも。

誤字に気をつけて読んでねっ

次元犯罪者とか逮捕してみる

撃墜事件から5年が経った。

犯罪者更生部隊の任務で何度か死にかけたりしたけれど、何とかやっています。

そんなこんなで、そろそろ異動の時期。大丈夫だろうか？

魔法少女リリカルなのはStrikerS始まります。

「エリアサーチを頼む。」

『範囲はどうしますか？』

「半径500mだ。」

俺の指示を聞き、俺のストレージデバイスがエリアサーチを行う。最低限のやり取りが可能なAIが入っているので、厳密にはストレージではないが、ストレージと大して変わらない。

今回の任務は管理外世界に逃げ込んだ次元犯罪者を追撃することだ。

現在俺の所属している部隊　犯罪者更生部隊の任務は主に次元犯罪者の逮捕。年中そればかりやっている。目には目をつてやつだ。

俺の部隊に回されるような任務は、どれも優秀なエリート　つまり現実を知らない生温い奴らに任せられないような酷い犯罪者を処分するものばかりだ。今回の犯罪者は人体実験を行っていた奴で、本拠地だった研究所には脳みそ輪切りにされた子供とか、臓器を引きずりだされて電極に繋がれたまま生かされている男とかがいた酷い奴で、投降の意思などまったくないみたいだ。

今回のような犯罪者のケースでは珍しく、本人もそこそこ強いという嫌がらせのような奴。

『右斜め前方457mに魔力反応あります。』

「了解。」

んー　ここからじゃ確認できないな。廃ビルが邪魔だ。上に上がるか。

あ、言ってなかったけど、この管理外世界、昔は人が住んでいたみたいで、廃ビルとかが残っている。

魔力で足場を作り、廃ビルの屋上まで駆け上がり、魔法の用意をする。

「長距離射撃で仕留めるか。セットアップ。」

『セットアップ。』

一瞬俺の魔力光である蒼色に光り、服装が変化する。デザインは黒が主な色の服。別段色に括ってはいなかったが、夜の活動が多かったので、黒になった。因みに今は昼間である。

スコープを覗き、狙いを定め、対象を確認する。どうやら、逃げ切ったと思っているようで、廃ビルの中で警戒もせず、のんきに休憩している。

「魔力圧縮開始、魔法陣展開及び魔力吸収発動。」

ライフルとなったデバイスの銃口と足元から魔法陣が展開し、光りを放ちだす。因みに今回はミッド式の魔法だ。

周りに存在する微かな魔素を根こそぎ吸収し、溜めの動作に入る。

「カートリッジフルロード。」

『ロード カートリッジ。フルロード。』

6つのカートリッジが一気に排出され、今から使う魔法に魔力を上乗せする。

「一撃必中」

『ソニックシューター』

俺の声に反応して、デバイスが魔法を完成させる。反動に備え、肩の力を抜き、受け流す用意をしてトリガーを引いた。

放ったのは、圧縮に圧縮された小さな魔弾。されど、威力が小さいのではない。そもそも俺が求めるような大威力は、既存の砲撃魔法を使うと、魔力消費が多すぎる。

だから、改良した。ソニックムーブなどの加速移動術式を変え、加速のみの術式を取り出し、射撃の魔法に応用する。速度は威力に繋がって、威力アップになるという訳だ。まあ、加速の魔法は、もともと多様していたから、そんなに苦労しなかったけど。

「こちらカワカミ。ターゲットの撃破を確認した。回収を頼む。」

《了解。》

取り合えず通信を繋げて、撃破を報告する。え？ターゲット？眉間を打ちましたけど何か？ 思ったより障壁硬くなかったしな。カイトリッジを無駄にしてしまった。それに、溜めの時間も無駄にしたな。

「お前、相変わらずしぶとく生き残ってるな。」

「出合って第一声がそれですか。」

俺が帰還して、取り合えず上司に報告しに行くと、出会い頭に文句を言われた。

ここは、犯罪者更生部隊の本部というか本拠地というか　まあそんな感じのところだ。

いくら犯罪者で構成されているとはいえ、そこその設備が揃っている。この隊員は大抵犯罪者なので、無料奉仕が当たり前どころだけれど、衣・食・住は俺がいたところよりマシだった。満足した食事がありつけるしな。

「大体、お前がいるせいで無駄に費用を使っているんだぞ。何とかしろ。」

「知りませんよ。文句をいうなら、俺をここに送りつけた上層部に言ってください。」

「それができたら苦労しねえ」

俺の言葉に、上司は疲れたように机に突っ伏した。ざまあ。

ん？なんで俺がいると無駄に費用を使うのかって？

ここ犯罪者更生部隊が自殺部隊だってことは話したよな？んで、任務に行くで大抵数回で死ぬ訳だ。自分の能力値以上に任務をやっているしな。

だから、食事とかそういうものがそこそこ高価な物が与えられるんだ。どうせ1週間くらいでいなくなる人材だしな。

だが俺は生きている。もともと、自分の能力値以上の力を出せるし、成長期だったこともあり、魔力値は上昇している。当時はBランクだったが、今はA+だ。それでも低いけど。

他の生き残った要因は、当時が陸戦Cだったこともあるな。受ける任務はA A 辺りだし。

「お前が来てもうそろそろ5年になるのか。意外と早いもんだねえ。」

「そんなことより報告です。」

「相変わらず堅い奴だな。」

「いえ、貴方が馬鹿なだけかと。」

「俺、お前の上司だからな!？」

そろそろ、俺がこの部隊に来てから5年である。要するに、この部隊からおさらばってわけさ。

因みに、俺の馬鹿上司。あれでも有能な人材で、なんでこんなところにいるのか分からないくらいだ。まあ、何かやらかしたか、有能な人材を使わないと、犯罪者なんて纏められないかのどっちかな。

「今回の違法魔導師ですが、研究施設は破壊、本人は逃げたんで追撃後いつも通り回収してもらいました。」

「毎回思うんだけど、お前どうやってんの？」

この部隊、基本的に仕事をしているところの映像を撮らないことになっている。

撮れないことはないんだが、戦闘中の映像を撮って元犯罪者の反感をかわないようにするのが目的だ。昔、映像を撮られてかなり怒ったやつがいたみたいで、いろいろと反逆されないように対策をとっているのに、それを突破しそうになるまで暴れたらしい。それ以降、映像は撮っていない。

お陰で、レアスキルについて隠すのが大分簡単になった。俺の戦闘情報は、前の部隊にいた頃のだけだろう。召喚師ってのは分かるだろうが、魔力吸収については一切分からないだろうな。秘密に飛ばしてくるサーチャーとかフィーに誤魔化してもらってるし。

「馬鹿には理解できない方法です。」

「絶対俺を馬鹿にしているだろ！」

「馬鹿にだなんて　ふっ」

「鼻で笑った!？」

「いやー、この上司いじるの面白いんだよね。一タリアクションが
大げさだし。」

「それで、お前。陸と海、次はどっちに行くつもりなんだ？」

「間違いなく陸ですね。海には馬鹿ばっかですし。」

「いいのか？海でやっていける戦闘力があるなら、そっちのほうが
昇進も早いし、給料も高いぞ？」

「それでも、馬鹿には付き合ってられませんね。引き抜かれたら仕
事くらい真面目にしますけど。」

「やっぱり堅いぞ、お前。」

「思考がガツチガチの貴方に言われたくありません。馬鹿的な意味
で。」

「くっ　　！まあいい、続きだ。」

「実際、海は馬鹿ばかりである。いや、真面目なやつがないわけ
ではないが。」

ロストログアを見つけては、管理しなければだの、それは危険だだの何かしらの理由を付けて強奪していく。封印するときも、失敗したり暴走したりしたら撤収して放置。落ち着いてから回収していくらしい。もうどっちが悪かわからないね。

その点、陸はちょっと危険な時もあるけど、馬鹿は少ない。大きな力をもっていないからか、自分がどの程度できて、どこからが無謀になるか、自分の実力を把握し身の程わきまえている。管理局本局からはいろいろ言われてるけど、少なくとも、海の連中よりも有能だ。

「陸に行くなら、陸上警備隊に異動だと上から指示がきている」

「陸上警備隊ですか　どうせ、ミッドの端っこでしょ？」

「よく分かったな。」

「よっぽどお上は自分が嫌いみたいですな。昇進させたくないんでしょう。」

「お前、何やらかしたんだ？」

「ちよつと、管理局お気に入りのエース様を傷物にしまっただけですよ。」

「お前つてときどき馬鹿やらかすよな。」

「貴方に言われるのは癪ですが、否定しません。」

「ふっ」

何だそのドヤ顔は。やめろ、殴り倒したくなる。

そもそも、俺だって好きで傷物にしてしまったわけじゃねえ。そういうことになってしまっただけだ。

まあ、馬鹿やらかしたのは否定しないけど。

「それで、異動はいつすれば？」

「明日だ。」

「すみません、聞き取れなかったんですが。糞虫。」

「だから、明日だつて言ってるだろ。あと、糞虫つて。絶対聞こえてただろ！？」

「ああ、すみません。思っていたことがつい。わざとです。」

「誤魔化せてないからな！！」

「そう思われなくなかったら、何で今頃教えたんですか。」

「そ、それは」

異動の通達は、数週間前には来る筈である。しかも、今回はまだ海と陸のどちらかすら決めてなかったのだ。それなのに明日とかおかしすぎる。

こいつ、何か隠してる？

「からだ」

「？。聞こえませんでした。もう一度言ってください。」

「通知に涎を垂らして読めなくなっていたからだ！悪いか！」

「一度死んでこい」

「ぐぼふぁッ」

悪は滅びた。

というか、あり得ないだろ。部下の異動通知に居眠りして涎を垂らすとか。なに考えてんだ？

どうせ本来なら陸にしか異動出来なかったんだろうな。俺が海と答えたらどうするつもりだったんだ？まあ、天地がひっくり返ってもあり得ないけど。

それを言ったら、俺はそう言うと思ってたとか言って調子にのるか

ら言わない。

「それじゃあ、失礼しました。糞上司。精々頑張ってください。こっちは誰かさんのせいで準備がありますんで。」

俺は返事も聞かずに、机で悶えている変態を放置して自室へ向かう。

はあ　今夜は徹夜かなあ。あ、あとで時間とか聞いとかないと。
またアイツに会わないといけないのか。鬱だ。

くある日のなのはさんく

「デイベイーンバスターーーー!!!!!!」

「グワアアアアツツ!?!」

私のバインドからのデイベインバスターを受けて次元犯罪者が撃墜される。

さて、いつものことをやりますか。

「次元犯罪者さーん」

「くそっ！こんな小娘につ！ 何だよ、笑いにきたのかよ」

「ちょーっと違うね。犯罪者更生部隊のカワカミって人知ってる？」

「カワカミだあ？ ああ、だいぶ前に同じ仕事してた奴で、捕まったのにそんな奴がいたな」

よし、今回は当たりだ。たまにいるんだよね、レンヤ君のこと知っている次元犯罪者が。

「教えて。」

「はあ？てめえ何言ってるんだ？んなこと教えるわけ？？」「チャキへ？」

「その人のこと教えてくれる？」

「よし、分かった。話すから、ちょっと待つんだ。だから、その収束砲をゆっくり下ろそうか」

「デイベイーンバスターーーー！！！！」

「えー！？そこ撃つところ！？ちょ、おま、みぎゃああああー！？」

「はやて、はやて」

「ん？ああ、フェイトちゃんか。どないしたんや？」

「なのはが次元犯罪者を捕まえた後、笑顔で帰ってくるんだけど。」

「
」

「最近鼻歌まで歌ってて。捕まえられた犯罪者は『砲撃怖い、収束砲怖い。悪魔だ。』って繰り返し喚いているんだって。私、何かした方がいいのかな？」

「そつとしておくんや、フェイトちゃん。人にはそれぞれ性癖ってもんがあるんや。友達なら受け入れるべきや。」

「そうなの？」

「聞こえてるからね！？はやてちゃん！！！」

そんな日常。

次元犯罪者とか逮捕してみる（後書き）

またつまらぬものを書いてしまった。アーツ！

なんかゴメン。

という訳で、6話でした。

何か、この小説、思ったより凄いことになってますねw気がついたら日間9位というww

誰だこんな小説読んでる暇人はww嬉しいですけどww貴方が同志かww

というわけで、いつも通り誤字指摘お願いしますw

陸士警備隊とかしてみる(前書き)

本日分の小説投下です。

いやゝ予約機能を使って投稿してみました。

何か先に仕事終わらせたいので、俺できる奴感に満足。

陸士警備隊とかしてる

陸士警備隊に異動になった俺。

上司は苦手な奴になったし、こき使われるし、ロリコン多いし。

ほんつとう、上手くやっていけるかなあ。

でも、きちんと仕事はこなして見せる。

魔法少女リリカルなのはStrikerS始まります。

「なのはさんが一番に決まってるだろ！？あの幼さ残る可愛さが理解できないのか！！！」

「はっ！フェイトさんに決まってる！あの凛とした美しさが分かんねえのか！！？」

「んだとゴラァ！！！」

「殺んのかゴラァ！！？」

どうも、陸上警備隊に異動になったレンヤです。

最近、なのはファンの不良グループとフェイトさんファンの不良グループの争いがよく勃発しています。いい歳になって16歳の少女で騒ぎやがって。 ロリコンが貴様ら。

陸上警備隊に来て一週間経ちますが、仕事は不良の鎮火ばかり。どうやら細菌の ゴホン。失礼。最近の不良はハイスペックのようで、魔法を使ってくるので、魔導師があまり多くない陸では困っているとか。

だから、魔導師の それもソコソコ実力のある俺は、戦力として重宝されています。お陰で、他の担当地区まで行ったりと、四六時中働いてばかり 残業代くらいよこせ!!

「はいはい、そこの君達。注目〜!」

「ああん?」

「何だ、この餓鬼?」

おー、怖い怖い(笑)

モヒカンいるよ、モヒカン（笑）絶滅してなかったんだ。

「陸上警備隊所属のレンヤ・カワカミ 三等陸士だ。通報を受けてやって来た。大人しくお縄につきやがれ。」

「「ブワッハッハハッ！！」」

「何だ？面白いことでもあったか？」

急に笑い出しやがって。まあ、大体予想はつくけど。モヒカンの癖に生意気な。

「こんな餓鬼が陸上警備隊！管理局の人材不足も深刻なんだな！」

「はいはい、ロリコン乙。いいから大人しく捕まっとけ。痛い目にあいたくなかったらな。」

「「んだと！？」」

俺のやつすい挑発に怒ってそれぞれの武器を俺に向ける。何種類かの魔力光が混ざり合ったようか光が発生し、不良たちの服装が、痛々しい文字が書かれた服装に変わる。

俺様最強って（笑）サイキョー！の間違いだろ（笑）

「てめえの敗因はたった一つ。お前は俺を怒らせた。」

「うおー！兄貴カッコいい！！」

「っ！てめえ、俺の台詞取るんじゃない！！」

不良の言葉と共に、魔力がデバイスに収束していく。ミッド式の魔法を使ってるみたいだ。

つてか収束率ショボい（笑）これは酷い。

「カタストロフブレイカー！！」

不良のデバイスからめっちゃ細いレーザーが放たれた。

これでブレイカーとか名前負けにも程がある。名前が廚二すぎる。誰だよ、なのはのスターライトでも真似したつもりか。

「ほい」

バチッ！

「「なっ！？」」

取りあえず、魔力を纏った手で弾いておいた。痛くも痒くもないな。

「セットアップ」

『セットアップ』

今度は俺の服装がいつもの黒いバリアジャケットに変わる。こうしないと、デバイスの処理能力が限界まで引き出せないしね。

「杜撰だな。外側に対して気を回していないから簡単に割り込まれるんだよ」

それ、なんて禁書目録？

「んだと!?!」

「術式の構成が甘い。収束率が低い。そんな魔法に割り込んで打ち消すくらい簡単だ。」

実際、そんなに簡単なことじゃないけどね。ある程度実力があるといけないし。

「舐めやがってっ!」

「森羅万象の翁 汝の審判を仰ぐ???」

「「!?!」」

俺の眼前に召喚魔法の魔法陣が出現し、蒼色に光を放ち始める。

こいつは魔力は大体Cぐらいの消費だからな。A+になった今、多少の戦闘には単独で召喚できるようになった。

「現れる『ラムウ』」

『コール サモン ラムウ』

出てきたのは老人の魔導師。これでもFFの召喚獣である。杖を持ち、バチバチと電気を飛ばしている。

「「
」」

ん？どうしたんだ？肩なんか震わせて？

「「アッハハハハッ」」

ですよー。召喚したと思ったら、出てきたのお爺ちゃんですもんねー。普通そうなるわ。

「何かと思ったらジジイかよー！ プ、プハハッハ死ぬー！」

「おたちゅけは、お爺ちゃんでちゅかー？」

「
」

決めた。手加減してやろうと思ったけど、我慢の限界だわ。 非
殺傷設定だからイイヨネ？

「おい、お前ら。」

俺の感情に呼応するかのように、ラムウは杖を持っている手を掲げた。

次の瞬間??????

ズガアアアンツツ!!!!!!

真っ白い閃光が、視界いっぱいに広がった。

あれ？ラムウさん怒ってらっしゃる？魔力が余分に持ってい
れたけど、気のせいだよね？だよね？

落雷の着弾地点の道路は焦げて抉り取られている。よかったー結果
張っておいて。危うく俺の力がバレるところだったぜ。

「」
「」

あまりの光景に、空いた口が塞がらない不良達。

正気に返った不良達は一斉に口を開き始めた。

「待つてくれ、俺たちが悪かった。争いはもうしない、だからそれだけはっ！」

「管理局員 いや、兄貴！管理局は市民を守るもにだろ！？だよな！！もちろん、俺もそうだ！俺は一生兄貴に着いて行きます！！」

「俺も！」「俺もだ！！」「俺だって！」

「」「あーにーき！あーにーき！」「」

「なるほど。お前達の言いたい事はよく分かった。」

「」「じゃ、じゃあっ！！！！」「」

ふっ、希望に満ちた顔をしているな。

駄菓子菓子！！お前達不良の運命は、何をしたってすでに決まっていたのだよ！

「だが断る！」

「」「なっ！？」「」

不良達に動揺が走り、希望に満ちた顔が絶望に変わった。

ふっ、ざまあ。

「お前達は私情の為に回りの住民に迷惑をかけた！それなのに、ごめんなさいと言ったら、はいそうですか。で済むと思ってんのか！
？ああ！？」

「「「そ、それは」「」」

「自分の為に動いてんじゃねえぞ！！」

「「「」「」」

「そして何より」「

「「「??」「」」

「俺の貴重な睡眠時間を奪ってんじゃねえぞ！！」

「「「あんたもメツチャ私情で動いてるだろ！！！！！」」」

んだよ。こちらら残業に続く残業で疲れてるんだよ！！寝るときぐらいそつとしてくれよ！！

やっと眠りについたら、真夜中に呼び出しだぞ！理不尽過ぎるわ！
つつーわけで、不良には鬱憤晴らしの的になってもらいまーす。八つ当たりとも言っ。

「というわけで、的になってくれ。拒否権ないけどね。」

俺の意思を汲み取って、ラムウが魔力を溜め始める。いっちょやるか。

「蹴散らせ、『裁きの雷』」

再び、視界を白に染め上げた。

「いやー、すまないね。こんな真夜中に出勤してもらって。」

「そう思うなら残業代くらいください」

「無理な相談だね」

「ですよ〜。」

場所は変わってミッドの端にある陸上警備隊の支部。ミッドは意外と広いので、支部が街中に幾つか存在している。ここは中央からもうとも遠いところだ。

犯罪者なんてめったに出ないし、昇進は先ずないと思っていいだろう。

支部長は、眼鏡を掛けたイケメンフェイスの優男である。結婚しているらしい。美人な嫁さんと娘が家で待ってるらしい。モテるらしい。

イケメン爆発しろ。

「報告ですが、通報現場では魔導師の不良同士で言い争って、今にも戦闘が始まりそうでした。」

「むふむふ、それで？」

「接触したら魔法を使ってきたので、反撃し捕縛。近くにいた警備隊に引き渡してこちらにきました」

「そうかい　ご苦労様。お茶でも飲むかい？」

「いえ、結構です。男と飲む趣味はありません。何より寝たいです。誰かさんのせいで、ろくに寝てませんからね！」

「やれやれ　。随分と嫌われてしまったものだ。　ところで、誰と寝るんだい？」

「嫌味か！？嫌味だな！！嫌味ですね！！イケメン爆発しろ！！」

「ふっ」

「うわーんっ！！！！覚えてろよーーッ！！！！」

そう言つて俺は、部屋から走り去つた。

けして逃げたんじゃない。絶対に。違つたら、違う。戦略的撤退なんだ。

言つてて悲しくなつてきた。

「またある日のなのはさん」

「なあ、はやて。なのはの奴、何であんなに機嫌がいいんだ？」

「あ、ヴィータ。何や、居たんや？」

「主、私も居ます。」

「シグナムも！気付かんかったわ」

「そんなこといいから、なのはの奴何であんなに機嫌がいいんだ？」

「ヴィータ、この世には、知らんぼうがええことも沢山あるんや。気にしちやあかんで」

「はやてが言うんなら知らない方がいいんだな！」

「おう、そうや」

「 実のところどうなんですか？主。」

「あんな、実はなのはちゃんに隠された性へk「聞こえてるよ！？はやてちゃん！」「げ！？」

もう、はやてちゃんはちよつと目を話した隙にコレ何だから。一度キチンとお話したほうがいいのかな？

そりゃー確かに、犯人が吹き飛ぶのは爽快だけど それとこれは違うからね！？

「流石の私も、それ以上は怒っちゃうよ！」

「まあまあ、なのはちゃん。冗談やないか。友達ならそれくらい寛容にならへんと、モテへんで？」

「また、そうやって誤魔化して！はやてちゃんがそうするなら、コッチにだって考えがあるから！」

「何や？言ってみいや」

「自分だけファンクラブがなかったのを気にしていたことを言いふらしてやるー！ー！」

「ちょ、なのはちゃん！？」

そう言ったら後、私は走り去った。後ろから、

「主　いいことがありますよ」

「はやて　意外と気にしてたんだな。」

「ちょ、誤解や二人とも！！そんなこと思ってたんから、その生暖かい視線をやめい！！」

「主　「はやて　」

「う、うわーんっ！！！！」

とか聞こえてきたけど、関係ないったら関係ないっ！

そんな日常（笑）

陸士警備隊とかしてみる（後書き）

どうでしたか？主人公はシリアスなときはシリアスに頑張りますけど、それ以外では普通にはっちゃけてます（笑）

はやてファンクラブ 勿論、ありますよ？ただ彼女が気づいていないだけです。

さて、いつも通り誤字の指摘などお願いします。修正入るのは遅れそうですけどね。

少女視点、不良とか撃退してみる（前書き）

ふつ、なのは視点と思うか。

駄菓子菓子！今回は違う！俺って何がしたかったのか分からない。
そんなお話。

キャラ崩壊とかあるから駄目な人は見ないほうがいいのかも。

それではどうぞw

少女視点、不良とか撃退してみる

空港での火災があつて、私がなのはさんに救出されてから約1年の月日がたった。

このままじゃ駄目だつて思って、カッコいいなのはさんに憧れて、私は陸士訓練校に入学した。

私の戦い方は特殊だから、自分でデバイスを組んで、それで出会った新たな友達。

これから頑張つていこうと思います。

魔法少女リリカルなのはStrikerS始まります。

「ねえ、ティア。ティア!」

「何よ、五月蠅いわねえ。もう少し大人しくできないわけ? あ
と、ティアって何よ?」

「えへへ、あだ名!ティアナだからティア!」

「あだ名って 略す程長い名前じゃないでしょ？あたしの名前は」

「駄目 かな？」

「 分かった、分かったわ好きにしてください。だからそんな顔しないの。」

「えへへ、ありがとう！ティア！」

「まったく 調子狂うわねえ」

私と陸士訓練校で知り合った、ティアは休みの日である今日を利用して、ミッドチルダ中央に来ています。

何でかって言うと、え〜と確かデバイスの銃に使うパーツを取り替えたいんだって。私には、そういう小難しいことはよく分からないんだけど、撃ち手の人によって癖とかがあるから、それに合わせてパーツを調整するって言ってた。

私は、お姉ちゃんに教わりながらやったから、軽いメンテナンス程度しか分からないんだけどねえ〜。

「ちょっと、スバル！？どっちに行ってるの！デバイスのパーツを売ってるのはそっちじゃなくて、こっちよ！」

「ゴメン、ゴメン。道忘れちゃった！」

「まったく、何やってんのよ。そのデバイス、どうやって組み立てたわけ？パーツくらい買いに行っただしょ？」

「私の使っているデバイスのパーツは、全部家にあつたの使つてたから。足りないものは、お父さんが買つて来てくれたし！」

「あんたの親つて、意外に過保護よね。厳しそうな顔に似合わない。」

確かに、私のお父さんはちょっと　いや、かなり過保護かもただ。でもでも、いい人何だよ！

ティアナの言う通り、ちょっと厳しいけどね。

「で、デバイスのパーツ売っている店つて、どっちだっけ？」

「次の角を左よ。そのまま真っ直ぐに進んだら、看板が見えてくるわ。」

「よし、じゃあ急いで行こう！」

「ちょ、待なさいよ！そんなに走らなくてもお店は逃げないわよ！」

ティアが後ろで叫んでいた気がするけど、大丈夫でしょ！一々嫌がる素振りとか、文句とか言ってくるけど、ちゃんと付き合ってくれるもん！

そう言うのが、ティアの良いところなんだと思う。えっと確かそう言うのを　　つんでれっていうんだっけ？

「到着ー！」

多分、ここで良いんだと思う。外に、デバイスを組む時に見たことあるパーツがあったから。

「ちょっと　　す、スバル。　　あんた走るのは、速すぎよ。」

ちょっとしたら、ティアもこのお店にやって来た。やっぱりここで合っていたみたいだ。

ティアは凄いゼエゼエって息切れしてるけど、大丈夫かな？

「ティア、大丈夫？」

「だ、誰のせいよ　　誰の。」

「ご、ゴメン。」

「べ、別にいいわよ。それにあんた　　謝ってばかりね。」

うう　　仕方ないじゃない。１年くらい前まで、人見知りする性格だったんだし。その時の癖っていうか、名残りっていうか　　反射的に謝っちゃうんだもん。

「それよりティア、見て回らないの？」

「ちょっと休憩よ。休憩。あんたは見て回ってれば？」

「うん、ゴメンね、ティア。」

「また謝ってる。」

「あう」

私はその場に居るのが恥ずかしくなって、早足で立ち去った。

私は特に何か欲しいデバイスのパーツがあるわけじゃないけど、見て回ることにした。

えっと、ローラー、ローラー　それくらいしか分からないんだけどねっ

「うわあゝ」

ローラー売り場を見つけると、そこには思っていた以上にローラーの数があつた。

あ、ローラーって言っても、色々種類があるんだ　確かに、よく考えればそうだよな。何もローラーの使用用途はローラーシューズだけじゃないもんね。

えっと　どれがいいのかな？

「あ」

そんな私の目に止まったのが一つのローラーだった。

「摩擦軽減、高魔力伝導率、ブレーキのし易さ　これいいかも。
えつと値段はつと　　げ」

た、高い　学生にこの値段は高すぎるよう。なんでこんなにデバ
イスのパーツの値段は高いんだろう？

これだけあれば、アイスが幾つ買えることやら　とほほ。

「スバルー？あたしの買い物は終わったけど、何かいいものでも
どうしたの？」

私が絶望に打ちひしがれていると、ティアナがやって来て、私に声
をかけて来た。うう、これには訳があるんだよう。

取り合えず意思表示をする為に、無言でさっきのローラーを指差す。

「何々　　うつわ高いわねえ　　流石使用率の低いローラー。」

「大人の社会って厳しいんだね　　」

「ま、買えないものはしょうがないわ。ほらスバル、さつさと帰ん
ないと、日が暮れるわよ？」

「あーうー　　。あたしのローラー　　」

「はいはい、お店の邪魔しないの。」

そう言われて、私はティアに引つ張られて出て行くのでした。欲しかったなあっ

「ねえ、ティア。」

「何よ？馬鹿スバル。」

私は帰り道を通りながら、隣にいるティアに話しかけた。

「ティアはさ 将来成りたいものとかってある？」

「どうしたの？急にそんなこと言いだして。」

「聞いてみたかっただけっ」

「あっそう。」

ティアはそう言って一旦立ち止まっていた足を動かして歩き始めた。私も置いていかれないように着いて行く。

「私は　そうねえ。執務官に成りたいわね。」

「うわっ！あの勉強ばかりの、頭いいやつ!？」

「何よ？何か文句でもあるの？」

「ううん。ティアらしいなあって。」

ティアは何か頭をよく使う仕事につきそうだしねっ！　私には、
到底無理な職業だけど。

性格的に合わないというか　頭より体というか　考えるより先
に手が出ちゃう！みたいな？

執務官かあ　ティアらしいなあ。

「そーゆーあんたはどうなのよ。」

「へ？私!？」

「そう。」

「私は　やっぱり、なのはさんみたいなカッコいい魔導師になり
たい！その後は　よくわかんないや」

なのはさんみたいな魔導師になって、その後私はどうするんだろう
なあ。陸士隊かもしれないし、教導隊に入ってみるのもいいかもし
れかい。何だったら?????

「ちょっとスバル！前！前！」

「え？」

どんつ、と何かにぶつかるような感触がして、目の前を見ると、いかにも不良って感じの男の人達がいた。

「痛つてえなあ、おい。何してくれちゃってんの？」

「ご、ゴメンなさいっ！！前見てなくて、すみません！」

「ああ？ゴメンですんだら警備隊じゃないの。分かる？」

「すみませんっ！」

あう、だつたらどうしたらいいの！？

「おい、よく見ろよ。コイツ、小っちゃいが、よく見たらソコソコ可愛くねえか？」

「確かに　おい、嬢ちゃん。ちょっと付き合えよ」

「え？」

「いいから早くこいつ！」

「きゃあっ!!」

男の人に乱暴に腕を引つ張られる。でも、着いて行くと何されるか分からないから私は抵抗した。

そうしてると、横からティアが割り込んで来た。

「ちょっと、よしなさいよ。嫌がつてるでしょ!」

「ああん? んだオメエ? コイツの連れか?」

「そうよ、嫌だって言うてんだから、さっさとどっかに行きなさいっ!」

「てめっ、調子にのりやがって! 丁度いい、人数合わせだ。お前もこいつ」

そう言つて、不良がティアに手を伸ばし、掴もつとしたその時???

「エクスカッリバー エクスカッリバー」

「」
「」

何か2人の間を変なナマモノが通り過ぎて行つた。気まずい沈黙が

流れる。

白く長い顔をしていて、死んだ魚のような目をしている。シルクハットをかぶっていて、手に持つステッキを不良に向けてこう言った。

「私に接近を許すとは　　ヴァカめ！！！」

「「「（う、ウゼエ　　！！）」「」」

多分、ここにいる全員が同じことを思ったと思う。

「おい何だよて？？」「私の伝説は十二世紀から始まった。」は？」

「聞きたいかね？私の伝説を。」

「んなモンし」？？「ヴァカめ！！！！君に選択する権利はない！私の伝説は十二世紀から始まったのだ！！！！」　　ウゼエ。」

謎のイラつく生物は不良の目の前までくると、持っているステッキを目の前に押しつけ、ふりふり左右に振り始めた。

「だあっ！！！！邪魔だ！目の前でんなもん振り回すな！！！！ちよ、何で激しく振りやがる！！やめ「ヴァカめ！！！！」ウゼエエエっ！！！！？」

ちよっと不良に同情するかも。助けないけど。

あまりのウザさに殴りかかった不良だが、ナマモノに避けられてしまった。避けたナマモノは、今度は何やら紙を突き出して来た。何なのかな？

「私の職人になるにあたって、守ってもらいたいことが1000項ある！！そのレポートに纏めておいた。よく目を通しておくように。」

「は？」

うわぁ本当だ。裏までビッシリ書いてある

「452時間目の私の5時間に及ぶ『朗読会』には是非とも参加願いたい。」

「誰がするか！！あっコラ待て！！ってへブ！？」

ナマモノは去り際に不良の頭に紙を押しつけ、唐突にその場から消えた。

頭から紙をとったを読んでプルプルと肩を震わせた不良は、「あの野郎殺す！！！」といって仲間と共にどっかに行った。

「助かったの？」

「ええ、そう見たいね 癪だけど。ってうわぁ！？」

さて、帰ろうか、という時に、再び唐突にあのナマモノが現れた。

「む、ム力つくナマモノ!!」

「ム力つくナマモノとは酷いな。助けてやったのに。まあ意図してやったけど。」

「へ?」

次の瞬間、ナマモノは消えて、代わりに男の人が現れた。

「陸士警備隊のレンヤ・カワカミだ。大丈夫だったか?」

「えっと、さっきのは?」

「ん?幻術に決まってるだろ?」

「「えええええ!?!」」

私達の声は、ミッドの空によく響いていた。

まさか人だったなんて

「す、すみません!わざわざ助けていただいたのに失礼なこと言うて!」

「いや、別にいいけどな。俺が好きでやったことだし。何より

そう見えるようにやってたし。」

「け、けどっ」

「はい、この話は終了ー！んで、お前さん達名前は？」

「あ、はい。スバル・ナカジマです！陸士訓練校に在学中です！」

「ティアナ・ランスターです。同じく陸士訓練校に在学中です。助けていただきありがとうございます。」

ちよー！？ティア何か棘のある言い方だなあ。せっかく助けてもらったのに。まあ、あれはムカついたかもだけど。

「ランスターにナカジマだな　そっか、君達が　ん？」

カワカミさんは何か私達に関することを言いかけて、急に黙って空を見だした。

「　了解しました。っと、すまねえな。仕事が入った。さっきの奴らが暴れてるみたいだわ。半分俺のせいだし、行ってくるわ。」

半分っていうか、全部だと思っけど　。私達助けるためにやってくれたことだし、とやかく言えないんだけどね。

「じゃあーなー！ー！」

そついい残して、不良が追っかけていった方に、カワカミさんは走っていた。

「　　なんか、嵐みたいな人だったね。　ティア。」

「　　そうね。」

あれ？ティアはなんだかご機嫌斜め？

今度会ったら、カワカミさんにはきちんとお礼をしないとね！

くオマケく

「　　ねえ、ティア」

「　　何よ、急に。」

「　不良に押し付けてた紙って、何て書いてあったのかな？」

「　　はい、これ。」

「　　え！？持ってきてたの！？」

「まあね、気になるじゃない。」

「それもそうだね　えっと　」

『ヴァカめ!!このロリコンどもがッ!!』

少女視点、不良とか撃退してみる（後書き）

8話終了です。

まさかのスバルとティアナのファーストコンタクト。ナマモノもといエクスカリバーにより印象付けることに成功。フラグは立てるか分らん。

ティアナさんが最後に不機嫌だったのは、いつもの持病（私って才能ない凡人病）が発症したからです。今回は幻術ですね。

そもそも、幻術で完全に姿を変えるのは高等技術って設定です。屋気楼的なシルエットならまだしも、完全に姿を変えるには恐ろしいほどの魔力コントロールが必要なんです。変身魔法ならまだしも。

あ、因みに主人公は、魔力吸収のお陰で魔力コントロールめっちゃ上手いです。

なんかこの小説、総合評価が凄いことになってますね？学校から帰ってきて画面を見ると1位の文字。見間違えかと思いましたよ。嬉しかったですけど。

まあ、テンションがゲージ振り切ったんで、打ち止めだったはずがもう一話書いてしまった。その結果がこれである。

誤字指摘等お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0919z/>

魔法少女の世界に転生とかしてみる

2011年12月5日22時54分発行